

序論)

皆さんおはようございます。2026 年第一主日礼拝、今日もこうして皆さんとともに礼拝できることを感謝いたします。今日は先週取り扱った 12 章、そして元旦礼拝で取り扱った 13 章の続きの箇所となります。元旦礼拝に来られなかった方もいらっしゃるので、簡単に振り返ります。

先週、私たちは I コリント 12 章から「私たちはキリストの体であり、それぞれ違う賜物が与えられている存在なのだから、劣等感を抱いたり、優越感を抱いたりする必要はない」ということを学びました。コリント教会には異言や預言など目立つ賜物を持つ人もいれば、目立たない賜物ゆえに劣等感を抱いている人がいました。また逆に、賜物を誇って他の人を見下す人もいました。そこでパウロは「からだ」の例をとりあげながら、足が「自分は手じゃないから「からだ」じゃない」と言うことはできないし、目が手に向かって「あなたは知らない」と言うことはできない。ということの説明して、教会は、互いの違いを受け入れ、共に苦しみ、共に喜び、弱く見える部分ほど大切にしていって歩んでいくのだと語りました。

そして、元旦礼拝では続く 13 章を取りあげて、賜物がどれほど立派でも、愛がなければ騒がしい音と同じで役立たずであり、賜物を正しく用いるためには愛が必要だということを学びました。

その上で、愛とは、感情ではなく、怒りを後回しにし、相手の益を求め、自分を高くせず、相手を大切に、その人が真理へ向かうために守り、信じ、期待し、その人の下から支え続ける事だということも学びました。

そして異言や預言、知識のような賜物はやがてその役割を終えて無くなってしまふものであり、永遠に残るものは、信仰と希望と愛であって、その中で一番すぐれているのは愛なんだということも学びました。

だから、今日の 14 章はその愛に基づいて教会を建てあげていくという話しの続きとなります。当時のコリントの教会が抱えていた問題を念頭に置きながら、教会の礼拝の場において、どのように愛を実践するのかということを教えられていきたいと思います。

1) 愛によって、教会を建て上げる賜物を求めよ - 異言と預言の違い -

まずは一節を読んでみましょう。

14:1 愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。

パウロはここで愛を追い求めなさいという命令と、御霊の賜物の中でも特に預言を熱心に求めなさいという二つの命令を発しています。「愛を求めなさい」というのは13章でまさに言っていたことなので、その理由はわかります。でも、なぜ預言を熱心に求めなさいとパウロは命じているのでしょうか。

それは、当時のコリントの教会には異言をことさら尊重するという問題があったからです。

以前もお話ししたように、コリント教会の周りにあった偶像礼拝の文化において、恍惚状態になって訳も分からない言葉を発することが、霊的に満たされている人の証拠のようにみなされていました。そしてコリント教会の人たちもおそらくその影響を受けていたんでしょうね。異言という、人間の知性では理解することができない言葉を使うときに、その人こそが神様に満たされている人だと多くの人が考えてしまっていたのです。つまり、コリントの教会は、異言偏重主義とでもいえるような状態になってしまっていたのです。

そこでパウロは、異言と預言の違いを語って、どちらが教会の成長の役に立つのかを明確にしています。

今日は一節一節を細かく解説していると長くなってしまうので、わかりやすくまとめて皆さんに説明していきたいと思います。

まず2節から5節の部分でパウロが語っている異言と預言の違いはこのようなになっています

賜物	異言	預言
語りかける相手	神に向かって語る (14:2)	人に向かって話す (14:3)
聞き手の理解	だれも理解できない (14:2)	人に届く形で語られる (14:3)
内容の性質	御霊によって奥義を語る (14:2)	人を育てることば／勧め／慰め (14:3)
主な効果 (成長)	自らを成長させる (14:4)	教会を成長させる (14:4)

つまり、異言は解き明かしが限りは個人に作用する。

そういうものだということです。

パウロは、5節で「みな異言で語ることを願います」と言っていますので、異言自体を否定しているわけではありません。でも愛は、自分だけの利益を求めるのではな

くて、他の人の利益を求めるものですから、教会の成長ということを考える時には、自分だけが理解できる異言ではなくて、多くの人を育て、勧め、慰める預言の方が勝っているとパウロはっています。

だから、愛に根付いて教会の成長を考えるときに、いかにも霊の働きっぽい異言を喜ぶよりは、人を育てる預言を求めなさいと勧めているのです。

2) 愛による教会成長に必要なこと - 意味がわかる -

パウロは 6 節から 12 節において、何で異言ではいけないのかということを、2 つの例えを用いながら説明しています。

7 節から 9 節は楽器の例えを用いて説明しています。

皆さん、(7 節表示) 楽器、例えばピアノを、曲のメロディーに従って弾くのではなく、ちっちゃな子供がやるようにバンバンバンって鍵盤を意味なく叩いたとしたら、それは音楽になるでしょうか？たまたま偶然、なんか曲っぽい感じになることもあるかもしれませんが、でも大抵は、意味なくピアノを叩いてるだけだったら、それはうるさい騒音でしかありません。本当に私たちの心に響くメロディーになるためには、ちゃんと音楽として成立する旋律を奏でなければ意味がありません。

また、(8 節表示) 昔の人は戦いの時の合図にラッパを使っていました。しかし、そのラッパの音色も、ちゃんと「前に進め」という意味を持つメロディーであったり、「止まれ」という意味を持つメロディーで吹かないと、戦いの合図としては役に立ちませんでした。

(9 節表示) 異言もそれと同じで、先ほど表で見たように、解き明かしがないと異言はその意味を周りの人に伝えることができないので、メロディーのない音、意味を持たないラッパの音色と同じように役に立たないのです。

10 節、11 節は世の中の言語を例に挙げて、パウロは同じ説明をしています。言葉も、相手に伝わっていないと、「この人は自分の国の人ではない外国人なんだ」と、そういうふうに隔たりを作ってしまいます。

本当は言葉には意味があるはずなのに、それがちゃんと意味として伝わらないと、一つにはなれないということです。

だから教会が愛を持って、そして賜物を用いて成長していくためには何が必要かというと、相手にちゃんと意味が伝わるように表現していく、それが必要だということです。自分だけわかっていればそれでいいということではありません。

だからパウロはそれを踏まえた上で、12節のように言っています。12節、一緒に読みましょう。

14:12 同じようにあなたがたも、御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会を成長させるために、それが豊かに与えられるように求めなさい。

皆さん、教会で愛をもって賜物を用いていくということは、自分だけのことを考えて賜物を使っているようではいけないのです。ちゃんと相手と一つになるように、相手に意味が通じるように用いて行かなければいけないということです。

ですから、これはもしかしたら失礼な物言いかもしれませんが、お祈りをする時とか、分かち合いをする時に、時々ボソボソボソっと、自分の口の中だけで発音される方がいますけども、それではいけないのです。ちゃんと相手に伝わるように配慮して言葉の声の大きさを調整したり、または言葉を整えて話したり、そのようにするのがやっぱり愛の実践なのではないでしょうか。

これは私が富川福音教会に赴任して感動したことの一つなんですけども、当時、八田由紀子姉は富川福音教会に在籍していました。そして役員として宣教区会議とか、場合によっては教団総会とか、そういうものに参加してくださっていました。そして参加して終わりじゃなくて、ちゃんとその時にどんなことを学んだのか、感じたのか、知ったのか、そういうことを翌週の証しの時間にいつも発表してくださっていました。しかも、丁寧に分かりやすく発表してくださっていました。

私が以前行った教会にも役員さんたちがいて、その役員さんたちも同じように宣教区会議だったり、教団の会議に出てくださったりしてましたけども、出席するだけで分かち合いを教会にするようなことをされていませんでした。だから私は由紀子さんの分かち合いをみて、「ああ、本当に姉妹は愛を持って教会を大切にされてるんだな」と感じました。

教会で愛をもって成長し合うというのはそういうことです。互いに主から教えられたことを、相手に分かる形で分かち合って共有し合っていく。それは御言葉によって教えられたことでもいいですし、由紀子さんの例のように宣教区や教団を通して教えられたことでもいいです。私たちは、そのように主から与えられたものを意味を持った恵みとして兄弟姉妹に分かち合っていく。これをすることが大切なのではないでしょうか。

3) なぜ意味がわかることが必要なのか

では、なぜ意味がわかることが必要なのでしょうか？ それは、教会として互いに与えられた主の恵みをアーメンするためです。16 節を読んでみましょう。

14:16 そうでないと、あなたが霊において賛美しても、初心者の席に着いている人は、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたが言っていることが分からないのですから。

この言葉はパウロが **13 節**で「異言で語る人はそれを解き明かすことができるように祈りなさい」と勧めているところから始まっています。

(**18 節表示**) パウロはコリント教会の誰よりも多くのことを異言で語れる人でした。でも、(**14 節表示**) 異言の祈りは、神様に対する霊の祈りではありませんけども、人には伝わりません。パウロはこのことを「知性は実を結びません」ということばで表現しています。

だから誰よりも異言を話せるパウロはどうしたかということ **15 節**

14:15 それでは、どうすればよいのでしょうか。私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。

時々、知性というものは聖霊の働きを邪魔するものだ、というふうに理解してしまう人がいるんですけども、そうではありません。正しい知性の使い方というのは、主によって導かれた霊的な導きをちゃんと教会で他の人が実を結ぶことができるように、人々に分かるようにしていくことです。それが正しい知性の使い方なのです。

だから例えば、賛美をする時に **LIP** (ゴスペルクワイア) の五十嵐信生兄は、周りの人たちが分かるように、その賛美について説明したりされますよね。それは霊によって主を賛美しつつ、人々がアーメンできるように知性を使っている賛美の仕方だといえると思います。

そのように私たちは祈る時も賛美する時も霊的にするだけではなくて、知性を用いて教会としてアーメンしていくのです。アーメンというのは、「その通りです。」

「それが真実です」と同意していくことですよね。私たちは、同じ信仰を持って共に祈り、共に賛美していけるように、私たちは互いに配慮して礼拝していく必要があるのではないのでしょうか。それが愛をもって賛美の賜物を用いたり、祈りの賜

物を用いたりしていくということだと思います。

だから誰よりも異言ができたパウロは 19 節

14:19 しかし教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ、ほかの人たちにも教えるために、私の知性で五つのことばを語りたいと思います。

と語ります。

教会でアーメンできない一万の異言よりも、一つになってアーメンできるわずか 5 つの知性の言葉を選ぶんだ。とパウロは言っています。

これが愛の選択です。

私たちはどうでしょうか。一人よがりの礼拝を捧げていないでしょうか。ここにいる兄弟姉妹が本当に一つになって主を礼拝できるように、そして、教会として成長できるように配慮し、それをいつも心に留めながら、共に祈りや賛美、そして、それぞれの奉仕をしていきたいと思います。

4) 大人としての配慮をもって

最後にパウロは 20 節から 25 節で大人としての考え方によって賜物を用いていくことを勧めています。20 節を読みましょう。

14:20 兄弟たち、考え方において子どもになってはいけません。悪事においては幼子でありなさい。けれども、考え方においては大人になりなさい。

私たちは悪事においては幼子、つまり悪いことは何も知らない。そこにはタッチしない。そういうふうに進んでいくべきではあります。けれども、教会の成長や一致のためには、何も考えないのではなくてちゃんと大人として考えて、判断して、賜物なり奉仕なりをしていきたいと思いますということです。

ではその大人として考えるというのはどういうことかということ、21 節以降で説明しています。ただ、この箇所はちょっと解説が必要だと思いますので、まとめずに丁寧に御言葉を読んで説明していきたいと思います。まず、21 節、22 節を読みましょう。

14:21 律法にこう書かれています。『わたしは、異国の舌で、異なる唇でこの民に語る。それでも彼らは、わたしの言うことを聞こうとはしない』と主は言われる。』

14:22 それで異言は、信じている者たちのためではなく、信じていない者たちのためのしるしであり、預言は、信じていない者たちのためではなく、信じている者たちのためのしるしです。

まず 21 節で引用されている言葉はイザヤ書 28 章の引用です。その箇所はもともと、神様が預言者を通して分かる言葉でイスラエルに対して悔い改めのメッセージを伝えていたにもかかわらず、彼らはその神様からの言葉を聞こうとしませんでした。だから神様はアッシリアという彼らとは違う異国の言葉を使う者たちを用いて彼らを裁くことにされました。その「異国のアッシリアを用いて裁く」ということを表現しているのが、「異国の舌で異なる唇でこの民に語る」という部分です。

つまり神様が同じイスラエル人である預言者を通して、イスラエル人にわかることばで語るのではなく、異国の民を用いるということ、異なる国の言葉を使う者たちを用いるということ自体が、この「イスラエルの民を拒絶して裁く」というメッセージになっていたわけです。

分りますか？ 分からない言葉を使うっていうのは、神様が彼らを裁き、拒絶するっていう意味を持っていたということです。

だから 22 節の「異言は、信じている者たちのためではなく、信じていない者たちのためのしるし」というのは、「旧約聖書において異言は、神様を信じなかった人たちが、神様によって拒絶される。裁かれるという意味で用いられましたよ」ということです。

意味がわからない言葉をガンガン言われるっていうのは、それ自体が拒絶の意味を持つということです。だから 23 節。

14:23 ですから、教会全体が一緒に集まって、皆が異言で語るなら、初心の人か信じていない人が入って来たとき、あなたがたは気が変になっていると言われることにならないでしょうか。

とパウロはいつているのです。

皆さん、大人として、信仰の初心者やまだ信仰を持っていない人たちに対する愛ある配慮を考えるならば、拒絶を示すわからない言葉をどんどん使うのが正しいでしょうか。それとも、相手のことを十分に配慮して分かる言葉を教会で使うようにするのがよいでしょうか？

当然、拒絶のメッセージではなくて、分かる言葉でメッセージが伝わるように配

慮するのが大人の考え方ですよね。

だからパウロは、教会は、イザヤ時代のイスラエルの民のように、神様を信じていない者たちの群れではなくて、【主】を信じている者の群れなので、その信じる者たちのためにある預言を使うべきなのだ。と勧めているのです。

そしてパウロは、もしみんなが異言ではなく、預言を用いるようになったらどうなるかを 24 節 25 節で語っています。

14:24 しかし、皆が預言をするなら、信じていない人や初心の人が入って来たとき、その人は皆に誤りを指摘され、皆に問いただされ、

14:25 心の秘密があらわにされます。こうして、「神が確かにあなたがたの中におられる」と言い、ひれ伏して神を拝むでしょう。

「皆に誤りを指摘され、皆に問いただされ、心の秘密があらわにされます」っていうのは、怖い感じがしますが、これは人々から責められるということではなく、聖霊なる神様によって、初心者の人、信仰をもっていない人の悔い改めるべきところが明らかにされて、その人が【主】の民としてよりふさわしく整えられるということです。

そしてその結果どうなるかというと、その自分の心を差し貫く御言葉を聞いた人が、それを語った人に対して、「神が確かにあなたがたの中におられる」と言い、ひれ伏して神様を礼拝するようになるのです。

つまり、その人が本当の意味で神様に立ち返ることができるということです。

結論)

今日は I コリント 14 章 1～25 節から、愛に基づいて礼拝の中で賜物を用いるとはどういうことかを見てきました。ポイントははっきりしています。愛は「自分が満たされること」だけで終わらず、「教会が建て上げられること」を選ぶということです。だからパウロは、見た目に派手で霊的に見えるものよりも、人に届くかたちで語られ、励まし、慰め、育てる預言を求めなさいと言いました。

そして、その愛は「分かることば」を選びます。祈りも賛美も奉仕も、自己満足になってしまえば、教会は一つになれません。互いに「アーメン」と言い合えるように、互いに同じ信仰で立てるように、伝わるように配慮する。それが大人の愛です。パウロが「教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ…知性で五つのことばを語りたい」と言ったのは、まさにこの愛の選択でした。

さらにパウロは、礼拝には「まだ信じていない人」「初心の人」が入ってくことを前提に語りました。教会が内輪の言葉や独りよがりの在り方に閉じてしまうなら、その人は「拒絶」を感じて帰ってしまうかもしれない。けれども、御言葉が分かるかたちで語られ、心が照らされるなら、その人は「神が確かにあなたがたの中におられる」と告白して、神様を礼拝するようになるのです。—ここに、礼拝の使命があります。神様が今ここにおられる、ということが、分かるかたちで現される。これが、愛をもって教会を建て上げる礼拝です。

ですから 2026 年、私たちが礼拝に集まるたびに、心の中で一つの問いを持ちたいと思います。

「いま私がしようとしていることは、兄弟姉妹を建て上げるだろうか。」

「初心の方にも、意味が伝わるだろうか。」

「みんながアーメンできるだろうか。」

この問いを通して、私たちがそれぞれに与えられた賜物を用いて愛を実践していくとき、神様は私たちの礼拝を、もっと温かく、もっと一つにし、もっと福音が届く場にしてくださると信じます。

最後に 12 節をもう一度一緒に読みましょう。

14:12 同じようにあなたがたも、御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会を成長させるために、それが豊かに与えられるように求めなさい。

愛を追い求めつつ、教会を建て上げる賜物を求め、分かるかたちで分かち合い、皆でアーメンし、神様の臨在が現される礼拝を、ともにささげていきましょう。

そのために、是非、みなさんがどのように奉仕していったらよいかをこれからの応答の時に、黙想して、書き出してみたいと思います。

応答の時を持ちましょう。